

日蓮大聖人御書全集

はちまんぐうぞうえいじ

八幡宮造営事

新版
1506
ゝ
1509

はちまんぐうぞうえいじ

八幡宮造営事

こうあん ねん

がつ にち

さい

いけがみむねなか

いけがみむねなが

弘安 4 年 ('81) 5 月 26 日

60 歳

池上宗仲・池上宗長

ほうもんもう そうろう

にじゅうくねん

ひび

ろんぎ

この法門申し候こと、すでに二十九年なり。日々の論義、

つきづき

なん

りようど

るざい

み 疲

こころ

痛

そうら

ゆえ

月々の難、両度の流罪に、身つかれ心いたみ候いし故に

しち

はちねん

あいだ

ねんねん

すいびよう起

そうら

や、この七・八年が間、年々に衰病おこり候いけれども、

斜

そうら

ことし

しょうがつ

きぶんしゅつたい

なのために候いつるが、今年は正月よりその気分出来し

すで

いちご終

うえ

よわいすで

ろくじゅう

て、既に一期おわりになりぬべし。その上、齡既に六十に

満

じゅう

ひと

ことし

過

そうろう

いち

に

みちぬ。たとい十に一つ今年はすぎ候とも、一・二をば

過

そうろう

いかでかすぎ候べき。

ちゆうげんみみ

さか

ろうやくくち

にが

せんけん

ことば

「忠言耳に逆らい、良薬口に苦し」とは先賢の言なり。

瘦

やまい

もの

いのち

嫌

ねいじん

いさ

もち

もう

やせ病の者は命をきらう、佞人は諫めを用いずと申すな

じようげ

ひとびと

ごへんじもう

こころ

物

り。このほどは、上下の人々の御返事申すことなし。心もも

憂

て

弛

ゆえ

もう

のうく、手もたゆき故なり。しかりと申せども、このこと

だいじ

く

しの

もう

思

いっぺん

大事なれば、苦を忍んで申す。ものうしとおぼすらん一篇、

聞

むらかみてんのう

さきのちゆうしよおう

しよ

な

たま

きこしめすべし。村上天皇の前中書王の書を投げ給いし

がごとくなることなかれ。

はちまんぐう

ごぞうえい

付

いちじよう

讒

奏

あ

さては、八幡宮の御造営につきて、一定ざんそうや有ら

うたが

そうろう

親

い

わ

み

もう

んずらんと疑いまいらせ候なり。おやと云い我が身と申

にだい あいだ 君 召 使 たてまつ

し、二代が間きみにめしつかわれ奉って、あくまで御恩

身 いちじそうい

のみなり。たとい一事相違すとも、なんのあらみかあるべ

我 身けんじん かみ 仕

き。わがみ賢人ならば、たとい上よりつかまつるべきよし仰

くだ いちおう 何 ごと じたい

せ下さるるとも、一往はなに事につけても辞退すべきこと

さいわ ざんしんとう そう 寄

ぞかし。幸いに讒臣等がことを左右によせば、悦んでこ

のぞ いち とが

そあるべきに、望まるること一の失なり。

ごかい せんじよう たも こんじよう じんしん

これはさておきぬ。五戒を先生に持って今生に人身を

え 得たり。されば、云うにかいなき者なれども、国主等謂れ

なく失にあつれば、守護の天いかりをなし給う。いわんや、

とが 当 しゅご てん 怒 たも

いのち 奪

てん はな たも

況 にほん

命をうばわることとは天の放ち給うなり。いおうや、日本

こくしじゅうごおくはちまんくせんろつびやくごじゅうくにん なんによ

しじゅうごおく

国四十五億八万九千六百五十九人の男女をば、四十五億

はちまんくせんろつびやくごじゅうくにん てん 守 たも

たこく

八万九千六百五十九の天まぼり給うらん。しかるに、他国よ

攻 きた だいなん のが

み そうら

しじゅうごおく

りせめ来る大難は脱るべしとも見え候わぬは、四十五億

はちまんくせんろつびやくごじゅうくにん ひとびと てん す

たも うえ ろく

八万九千六百五十九人の人々の天にも捨てられ給う上、六

よく しぜん ぼんしゃく にちがつ してんとう はな

たも

欲・四禅・梵釈・日月・四天等にも放たれまいらせ給うに

そうら

こそ候いぬれ。

にほんこく こくしゅうとう はちまんだいぼさつ 崇

たてまつ

しかるに、日本国の国主等、八幡大菩薩をあがめ奉り

何 ごこと

おも

はちまん

じりきかな

なばなに事のあるべきと思わるるが、八幡はまた自力叶い

ほうでん や

隠

たも

みずか

がたければ、宝殿を焼いてかくれさせ給うか。しかるに、自

たいか

顧

ほうでん

つく

守

らの大科をばかえりみず、宝殿を造つてまぼらせまいらせ

思

んとおもえり。

にほんこく

しじゅうごくおくはちまんくせんろつぴやくごじゅうくにん

いっさいしゆじよう

日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生が、

しやか

たほう

じつぼうふんじん

しよぶつ

じゆ

しやば

たほう

しよだいじ

釈迦・多宝・十方分身の諸仏、地涌と娑婆と他方との諸大士、

じつぼうせかい

ぼんしやく

にちがつ

してん

す

ぶんざい

十方世界の梵釈・日月・四天に捨てられまいらせん分齊の

にほんこく

しようじん

てんしやうだいじん

はちまん

ことならば、わずかなる日本国の小神たる天照太神・八幡

だいぼさつ

ちからおよ

たも

とき

はちまんぐう

造

大菩薩の力及び給うべしや。その時、八幡宮はつくりたり

くにたこく

破

四

塵

溜

とも、この国他国にやぶられれば、「くぼきところにちりたま

低

みづ 集

にほんこく かみいちにん

しも

りひききところに水あつまる」と、日本国の上一人より下

ばんみん

沙汰

か

し

万民にいたるまでさたせんことは、兼ねてまた知れり。

はちまんだいぼさつ

ほんじ

あみだ

仏

「八幡大菩薩は、本地は阿弥陀ほとけにまします。

えもんのたいふ

ねんぶつむけんじごく

もう

あみだぶつ

ひ

い

みづ

衛門大夫は念仏無間地獄と申す。阿弥陀仏をば火に入れ水

い

どう

焼

払

ねんぶつしや

頸

き

もう

もの

に入れ、その堂をやきはらい、念仏者のくびを切れと申す者

もの

でしだんな

な

そうろう

はちまんぐう

つく

なり。かかる者の弟子檀那と成つて候が八幡宮を造つて

そうら

はちまんだいぼさつもち

たま

くに

攻

候えども、八幡大菩薩用いさせ給わぬゆえに、この国はせ

もう

とき

てん

めらるるなり」と申さん時はいかがすべき。しかるに、天

予

知

ごぞうえい

だい

かねてこのことをしろしめすゆえに、御造営の大

番 匠 外

じんぐうじ

ばんしようをはさるにやあるらん。神宮寺のことの

外 せん おんはか

はするも天の御計らいか。

ゆえ ぶんえいじゅういちねんしがつじゅうににち おおかぜ吹

その故は、去ぬる文永十一年四月十二日に大風ふきて、

とし たこく 襲 きた ぜんそう かぜ てんち

その年、他国よりおそい来るべき前相なり。風はこれ天地の

つか 政 荒 かぜ 荒 もう

使いなり。まつりごとあらければ風あらしと申すはこれな

ことししがつにじゅうはちにち むか かぜ吹 きた

り。また今年四月二十八日を迎えて、この風ふき来る。し

しがつにじゅうろくにち はちまん 棟 あ うけたまわ みっか うち

かるに、四月二十六日は八幡むね上げと承る。三日の内

おおかぜ うたが もうこ ししや きへん はちまんぐう つく

の大風は疑いなかるべし。蒙古の使者の貴辺が八幡宮を造

かぜ吹 ひと 笑 沙汰

つてこの風ふきたらん、人、わらい、さたせざるべしや。

かえ がえ おんびん

返す返す穩便にして、あだみうらむる氣色なくて、身みを

婁 げにん 具

やつし下人をもぐせず、よき馬うまにもものらず、のこぎり・か

金 槌 て

腰

笑

姿

なづち手にもち、こしにつけて、つねにえめるすがたにてお

いちじ

違

たも

こんじよう

わすべし。このこと一事もたがえさせ給うならば、今生に

み

ごしよう

あくどう

お

たも

かえ

がえ

は身をほろぼし、後生には悪道に堕ち給うべし。返す返す

ほけきよう

たも

きようきようきんげん

法華経うらみさせ給うことなかれ。恐々謹言。

ごがつにじゅうろくにち

かおう

五月二十六日

花押

たいふのさかんの

大夫志殿

ひようえのさかんの

兵衛志殿